掲載者の声

全員参加できる東京オリンピック・パラリンピック２０２０

有賀　暁子

いよいよ東京オリンピック・パラリンピックが近づいて来た。その日を目指す選手たちの日々の練習やトレーニングは並大抵の事ではないと想像できる。身体的な調整はもちろん精神的な調整も大変なことと思う。全ての選手がご自身の最善を尽くせるよう応援するばかりだ。

応援と言えば、運よく観戦チケットが当たった方はいらっしゃるだろうか？

私は残念ながら申し込んだすべてのチケットがはずれてしまった。せっかく東京に住んでいるのだから間近で各競技を観戦したいと思っていたのだが、こればっかりは仕方がない。

しかし、東京オリパラの楽しみ方・関わり方は誰にでもそのチャンスがある。

もちろん最高の関わり方は選手として出場することだが、その枠はごく限られたアスリートのみだ。

その他に東京オリパラに参加する方法としては、ボランティアとして大会を支えるという楽しみ方ができる。各種スポーツの大会は多くのボランティアによって運営が成り立っている。ボランティアとしての参加は、もしかすると選手を間近で見られたり、ボランティア同士の交流・連帯感などを体験できたり、またひと味違ったオリパラを体験できるかもしれない。

そして、最も多い関わり方はテレビ観戦である。テレビやラジオ等で観戦するのも立派な参加方法だ。テレビを通しての観戦も臨場感があり、選手の表情や息遣いまで伝わってくる。特にライブでの中継は、手に汗握りながら大きな感動と共に観戦できることだろう。

この様に、全ての人が様々な方法で２０２０東京オリパラを、選手の応援をしながら楽しむことができるのだ。今回初めて知る競技もあるかもしれない。そのルールや歴史を調べることも、そのスポーツをより理解し見え方が広がる方法の一つだ。

56年ぶりの東京開催となる東京オリンピック・パラリンピック。素晴らしい大会になる様、自分のできる参加方法で関わり盛り上げて行きましょう。

（元ＮＨＫテレビ・ラジオ体操インストラクター）

会わん方がいい

井口　昭久

私は２０１９年９月に「誰も老人を経験していない」という本を出版した。

出版社が新聞に広告を出してくれた。

それを見た文化センターの女性から講演依頼のメールがきた。

「新聞で著書の広告を目にしました。タイトルに大変興味を惹かれ、私どもの教室でお話いただけたらと思ったしだいです」ということだった。

そのメールから私は一抹の不安を感じた。実際に読んでいないのではないか？

そこで私は「本の題と内容が一致しないことがあります。私の本を送ります。それでよければお受けします」と返信して、著書を謹呈した。

数日後に本は着いたと言うメールがきた。思ったとおり彼女は本の中身は読んでいなかった。

その後連絡がないところをみると、私への講演は思案中のようだ。

「誰も老人を経験していない」という表題から「この世の中には老人は存在しない」と受け止められた可能性があった。

実際の本は「自分は老人だとは思っていない人でも実際は老人である」という内容である。彼女は失望したのではないかと思う。

誰しも老いることはできることなら先へ延ばしたいと願っている。

古代からルネサンスまでの歴史を調べて「老いの歴史」という本を著わしているジョルジュ・ミノワによれば、人類の歴史が始まるとすぐに老人は若さを失ったことを嘆いたそうだ。

いつの時代も老いより若さが好まれていたのは明らかであったと述べている。

社会にどのような進展が見られても、その土台となるのは基本的には身体的な逞しさであったという。

しかし最近の科学の進歩によって人間の脳は老いても進化することが分かってきた。健全な肉体を持たなくても健全な精神は宿るのである。

だから老いることは恥ずべきことでも心配すべきことでもないのだが外見の変化はどうしようもない。

私は紛れもない「老人を経験した老人」である。

文化センターの女性にメールをしようか迷っている。

「私には会わん方がいい」

（名古屋大学名誉教授・愛知淑徳大学教授）

会津と長州

伊藤　喜良

私が居住している福島県の会津地域は、日本の古い文化が残っており、日本文化研究の宝庫であります。特に奥会津と呼ばれる南会津地方は山間地であり、中世以来の人々の文化活動を具体的に明らかにすることができます。この会津地方は伊那高遠と強いつながりがあることは周知のことと存じます。保科氏が高遠から会津に入り会津藩主となったことにより、現在でも伊那とのつながりが認められるものが在ります。近世に高遠や長谷の石工が作成した作品が会津には多くみられます。

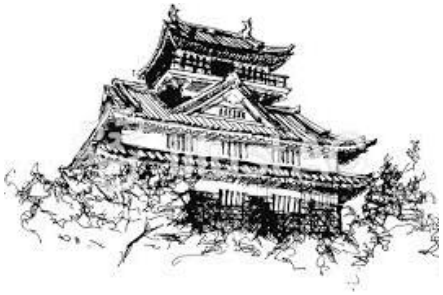
しかし、明治維新以降このような繋がりはぷっつりきれてしまいます。会津だけでなく福島県全体が新政府により徹底的に締め付けられ、抑圧されていきます。それを主導したのが長州であります。会津藩は長州を主体とした新政府軍に徹底的に過酷に打ちのめされました。隣の県の庄内藩は薩摩軍が主導して鎮圧したのですが、それは藩や住民に穏便な処置が取られており、鎮圧軍の総督であった西郷隆盛の銅像が後に感謝を込めて建立されるような状態でありました。会津藩は知ってのとおり幕末に朝廷の守護と京都市内の「テロリスト」取締のために京都守護職として活躍しております。この過程の中で長州藩との激しい争いがあり、そのしっぺ返しが行われたということになります。そもそも長州の松下村塾などは「テロリスト」の養成機関であったとの歴史研究者の指摘もあります。

現在でも会津では「長州は絶対に許さない」と考え、敵対的な思考を持っている人達が多くいます。会津だけでなく福島県内の他地域にも戦後になってからも政府から「嫌がらせ」や「いじめ」を受けたという人がいます。例えば私が勤めていた福島大学は四国と同じような広さのある県であるにもかかわらず、たった二学部しか造らなかったと怒る学長もいました。また県では国が大学を造らないなら会津に県立大学をと考えて政府と交渉したが「嫌がらせ」を受けて平成直前まで創設をみとめられなかったと激怒している県職のＯＢも存在しています。彼らは、これらはすべて会津と長州の戦いで負けたからであると考えています。挙句の果てが経済的苦境を脱出するために、地域経済の発展のためという甘い言葉に乗せられて造られた原発（電力は福島では使わない）が爆発して、さらなる苦難の道が強いられているというのが現状です。

会津の人達は、明治維新から何年とは決していいません。会津が敗退した戊辰(ぼしん)戦争以来何年といいます。昨年も「戊辰戦争から１５０年」とする集会がありました。戊辰は明治元年の干支です。何年経っても「長州は許さない、長州は憎い」と考えている会津の人々と「未来思考で関係を改善させたい」と考えた長州藩の城下町であった山口県萩市の市長が昨年十一月、会津若松市「市政１２０周年記念式典」に参加しました。しかし、市や市民は少し冷淡であったようでした。「仲直り」できないという言葉がよく聞かれるようです。未来思考にもとづいて関係を改善していくことは歓迎するところでありますが、このような会津と長州の関係をみていると、韓国と日本との関係に似ているような気がします。戦前植民地支配で痛め付けられた韓国の人達が、日本の政治家が「未来志向云々」といいながら、植民地支配がなかったかのような振る舞い（これは歴史修正主義といいます）に憤るのは理解できます。

長州の話に戻りますが、この長州閥の系譜である「雷神」が「もりやかけ」でそばアレルギーを振りまき、「桜鍋」で国家の秩序に激痛を起こさせています。このような「雷神」は、クワバラ、クワバラ。

（福島大学名誉教授）



霧に消えゆく

伊藤　延司

僕が毎日新聞の若手記者だった頃の話です。

東京オリンピックが終わった翌々年、昭和41年（1966年）の2月、僕は東京本社の社会部から、大阪本社の社会部に異動になりました。

大阪の歓迎会で、福岡県出身の上妻（こうづま）という記者が、最初に挨拶に立ちました。

彼は「伊藤君は僕と同じ昭和ひとけた最後の9年に、信州伊那で生まれました」と前置きし、挨拶がわりに歓迎の歌を送ると言いました。

そして「信濃の国は十州に」と歌い出したのです。

僕にとって異国みたいな大阪で、しかも九州生まれの男が「信濃の国」の歌を三番まで歌う光景は異様でした。

「上妻さんは、なんで長野県の歌なんか知ってるんですか？」

僕は嬉しさと驚きを隠せず、感激に上ずった声で聞きました。

上妻は「有名な歌ばい」と九州弁で無造作に答え、若い記者を指さしました。

「そこにいる男、高山いうんやけど、信州安曇野の出身でしてね。そいつが教えてくれたんですわ」

その言葉を待っていたかのように、高山が立ち上がりました。

「上妻さんは、まだ三番までしか歌えませんが、僕は最後の六番まで歌えます。それでは、伊藤さん歓迎の信濃の国を、上妻さんに続きまして四番から六番まで、一気に行きます」

高山が本当に歌う気になっているのを、浜田というデスクが「高山よう、六番までは勘弁してえな」と、慌てて止めました。

歓迎会場に爆笑が湧き起こりました。

どうやら大阪社会部では、こんなことが始終あるようでした。

驚きには、まだ先がありました。

二次会の小料理屋で、九州男児の上妻がお通しの小鉢を箸で叩きながら「陰か柳か勘太郎さんか」と歌い始めたのです。

驚いたのは、せまい店のカウンターを占領した十人ほどの社会部員たちが、そろって上妻の「勘太郎月夜唄」に声を合わせたことでした。

いつの間にか、厨房に消えていた部員の一人が、三度笠に見立てたお盆をかざし、暖簾をかき分けて出てきました。

彼は「なりはやくざに」と歌いながら踊るのでしたが、その仕草が子どものころに、村の祭りで見た青年団のお兄さんの身ぶり手ぶりに、そっくりだったので、びっくりしたのです。

彼は広島出身ということでした。

この男、いつ何処で勘太郎の踊りを見たのだろう。

彼が「霧に消えゆく」と歌いながら、暖簾を割って厨房に去って行く後ろ姿を、僕は目頭を熱くして見ていました。

なんで大阪社会部の記者たちが、伊那谷のやくざを知っているのか、僕は不思議な思いにかられていました。

もしかしたら、そのころ勘太郎さんは全国区だったのかもしれません。

80年代の半ばだったと思います。

姪が伊那市主催のコンクールで「ミス伊那の勘太郎」に選ばれたことがあります。

当時、伊那市では「勘太郎まつり」を催していた記憶があったので、伊那市役所に問い合わせてみました。

勘太郎まつりは昭和37年（1962年）に始まり、47年（1972年）まで10年間続いたということでした。

それ以後は「伊那まつり」に代わり、今も続いているそうです。

ミス伊那の勘太郎コンクールは、勘太郎まつりの催しで、今はやっていないということでした。

だとすれば、昭和60年（1985年）ごろミスに選ばれた姪の勘太郎は、何だったのだろう？

僕の手元には、勘太郎に扮し「ミス伊那の勘太郎」のたすきを掛けた姪の写真があります。

彼女の年齢を考えれば、この年が1980年代半ばでないと、つじつまが合わな

いのです。
伊那まつりになってからも、しばらくはミス勘太郎コンクールは続けられていたのでしょうか。
勘太郎さんが「霧に消えゆく一本刀」と消えゆくのは、寂しいことです。
（翻訳業・元毎日新聞英文局長）

私の健康法
―健康長寿を目指しましょう―

大羽　繁

私は、昭和8年1933年生まれで、87歳になりました。男性の平均年齢を超え、日本人の平均寿命も越えましたので、健康の維持増進について、語ることを許されるかと思います。
私は、現役を引退する70歳までこれと言った運動をやっていませんでした。現役引退後エブリサンデーになってから、何の趣味も持ち合わせておりませんでしたので、一日の時間をどう過ごしたら良いか大変悩みました。そんな時に太極拳と出合いました。将に「70の手習い」全くの素人。初歩から始めましたが、集中してのめりこむことが出来ました。
太極拳は、ご存知の様に、ゆっくりとした動作ですが、体内筋肉（インナーマッスル）を鍛えるのには最適の運動で、高齢者にとっても健康増進のためには最適なスポーツだと思います。私自身にとっても健康の維持に大いに役立ち、多くの人々との出会いにも恵まれ老後の人生を豊かにしてもらい感謝しています。
太極拳をやっていると自然に息の長い呼吸が出来るようになりますが、意識的に腹式呼吸をやることによって、効果は一層あがります。腹式呼吸は「吸った息を倍の時間をかけて吐き出す」のが基本ですが、毎日少しずつでも続けることにより、体内の筋肉が強化され、肺活量も増え、たくさんの酸素も吸収出来るようになり、血行も良くなりますので、お勧めします。
太極拳や呼吸法は、毎日根気よくやることが大事で、三日坊主では効果は出ません。
私は毎朝散歩、ストレッチ体操、ラジオ体操、太極拳の練習で二時間ばかり運動するようにしています。お蔭様で身体の動きは緩慢になってきましたが、毎年受診する老人健診では検査項目すべてについて異常なしということで、担当医に毎年褒められています。
（東京長谷人会相談役）

伊藤三千人「夕暮れの五郎山と月」

アメリカ生活56年、でも、伊那は特別な場所

大根田　勝美

今年は、東京オリンピックの年ですね。
これで二度目のオリンピックが東京で開かれる訳ですが、1964年の東京オリンピックが始まる二日前の10月8日に、私は駐在員としてニューヨークに向け羽田空港を飛び立ちました。
全てが灰色に感じたマンハッタンのブロードウェイで、電気屋さんが宣伝の為にテレビを店の外に出して、オリンピックの中継が見られる様にしてくれていました。
そこで、バレーボールの東洋の魔女が、ロシアを打ち破り金メダルを取った、あの時の感動は、今でも忘れることはありません。
今年のオリンピックも、多くのドラマを生む事でしょう。
私は会社を辞めてアメリカに定住し、市民権も取って56

年目を迎えています。

今は、このアルパイン、ニュージャージー州の家とホノルル、東京のマンションの３カ所を行ったり来たりの生活をしていますが、この恵まれた生活が出来るのも空襲を逃れて疎開した伊那で少年時代と思春期を過ごしたからだと思っています。

伊那市は、天災が少ない恵まれた土地ですが、残念な事に、アメリカはおろか東京でも伊那特産の農産物、それを使った加工品も、工芸品も目にする事はありません。

銀座にある長野県のショップにも、伊那の物としては、地蜂の瓶詰くらいです。

私は、伊那市で有機栽培の農作物を作り、有機志向が高まっている都会への進出をして欲しいと願っています。

港区西麻布にある私のマンションの近くにナチュラルハウス、ナショナル麻布、F&F、フランスから進出したビオ セボンなど、多くの会社が有機、無農薬の農産物を扱っています。

そんな中、伊那市長谷中尾で自然栽培のお米、カミアカリの生産をしている会社の細谷さんが居るのを知り、嬉しくなり昨年の11月に会いに行って来ました。

これには白鳥市長も力を入れて応援している様で、嬉しくなりました。

このカミアカリは、ホノルルでもニューヨークでも購入でき、私達の健康を助けてくれています。

伊那市を愛する人間として、さらなる伊那市の発展を願って止みません。

そして、２０２０年が、皆さんにとって実り多い年となりますように。

（実業家）

みちのくに見る高遠の石工魂

蟹澤　聰史

福島県南部の石川町を一昨年11月と昨年６月に訪れ、地元の方々に案内していただき、石川町から白河市周辺の狛犬を巡る機会があった。驚いたことに、この狛犬の作者はなんと高遠出身の石工小松利平の流れをくむ小松寅吉、小林和平の作だという。

小松利平は高遠藩を脱藩し、陸奥の国石川郡山形村(現石川郡石川町)福貴作で密かに工房を構えていた。その利平に弟子入りしたのが地元石工の寅吉だった。寅吉はその腕を見込まれ、後に利平の後継ぎとして小松寅吉となった。高遠石工の技術は小松寅吉の一番弟子小林和平、さらに多くの弟子たちに引き継がれ、石川町一帯にたくさんの狛犬文化を広めたのである。地元では寅吉、和平を東北のミケランジェロと呼んでいる。

石川町と周辺に存在する狛犬の石像はたいへん立派なものでその彫り方は一つ一つが個性的で躍動感に溢れ、精緻を極めている。またその石材は地元福島県南地方および栃木県北に分布する前期更新世に活動した「白河火砕流堆積物」いわゆる「白河凝灰岩」を用いているのが、個人的に大変興味の深いところでもあった。おそらく、材質が灰色で凝灰岩にもかかわらず緻密で均質なためであろう。

伊那地方で高遠石工の創った精緻な作品は輝緑岩といわれる暗青色の緻密な石を使ったものがよくみられる。遠く高遠から脱藩してきた利平はそんな石を探して歩いたのだろう。そして、地元の寅吉と出逢い白河火砕流の石に出逢ったのだと想像する。

こんなことを考えながら、石川町周辺の狛犬と石材を掘り出したと考えられる採石場を歩いた。残念ながら利平の作には逢えなかったが、機会をみてまた訪れようと思っている。保科正之もそうだが、ふるさと伊那・高遠とみちのくとの繋がりはこんなところにもあったのだ。

（東北大学名誉教授）

白河市東字下野出島　鹿嶋神社の狛犬（右）、小松寅吉作　明治３６年９月奉納。

スタバ？コメダ？ウェストヴィレッジ！

上岡　実弥子

「お茶にする」と「お茶する」は、たった一文字の差だ。が、意味は大きく違う。

「お茶にする」は、「やぁ、そろそろお茶にしんかぇ？」という時に用いる。「一服しよう」の意だ。とはいえ、伊那で出てくるのは「お茶」だけではない。煮物・漬物・甘い物（昔、『みごろ！たべごろ！笑いごろ！』というＴＶ番組があった…）等々の珍味がテンコ盛り。伊那のティータイムは、なかなか贅沢なのだ。

対して「お茶する」は、「おしゃべり」「デート」の意で、お茶は脇役である。大阪では「ねーちゃん、茶ぁしばかへんか？（お嬢さん、お茶を飲みませんか）」がナンパの常套句らしい。

デートとなると、ガゼンお店の雰囲気が重要である。ことに現代は、職場や学校ではなく、家庭でもない「第三の場所（サードプレイス）」で過ごすのが大人気。伊那も、スタバ、コメダ珈琲、など「第三の場所」が増えた。

伊那のコメダ珈琲で見た老夫婦は、黙々とコーヒーを飲み、雑誌を読み、何も話さず一時間ほどして一緒に帰った。これぞオトナ。贅沢で、素敵な時間の使い方だと思う。

きっとスタバでも、シャレオツなオトナがタブレット片手に寛ぐだろう……と思いきや、先日、衝撃的な話を聞いた。

なんと、伊那のスタバで宿題をしている中高生がいる、というのだ。

私にとってスタバは中高生が宿題などをする場所ではない。だいいち値段が高い。それに、ウチにお部屋があるでしょが！

もし隣で「サイン・コサイン・タンジェント」とやられたら、とたんに珈琲が苦くなるような気がする。

昨夏、何十年ぶりかにウェストヴィレッジで「お茶した」。実に感慨深かった。昔、ここで何を食べたかは忘れたが、誰と来たかはちゃんと覚えているのだ。

スタバで学ぶ中高生よ。君たちも、将来思い出すよなティータイムを、伊那で過ごしてくれたまへ。

（㈱キャラウィット代表取締役）

中小機構公式チャンネル（SMRJ：独立行政法人中小企業基盤整備機構）
１．管理職の職務とリーダーシップ　～女性管理者のマネジメント～
https://www.youtube.com/watch?v=Nvfd3Z5Erqs&feature=youtu.be

日本の音を未来に

川村　利美

新しい令和の時代に入り、初めての新年を迎え、オリンピック、パラリンピック年となり、わくわくしていましたが、一転、新コロナウイルスのニュースに毎日脅威を感じ、不安な日々が、続いています。

小学六年生の時に東京オリンピックがあり、新しいカラーテレビで観戦していた頃を懐かしく思い出します。今年のオリンピック、パラリンピックも無事開催できることを心より願っています。

今年も一月末にいなっせのホールで箏・三味線中心のコンサートを開催、好評により来年も続く予定ですが、駒ヶ根で十年開催させていただいてきた「むつのをコンサート」は昨年で終了しました。

今年はむつのをコンサートと共に育ってきたジュニア和楽器隊独自のコンサート開催。子供たちの成長と可能性に未来への希望を感じます。

伊那市でも昨年秋にジュニア和楽器隊を立ち上げ、今年は本格的に募集します。場所もいなっせなので、集まりやすく、小学生から高校生まで気軽に和楽器に触れて頂けるチャンスとして活用して頂きたいと思っています。

個人的には毎月三回くらいは伊那でお稽古もしていて、子育てが終わり復活してくる弟子たちもいたり、幼い頃からの友達もいて、伊那に通うのが楽しみです。そして、高速バスの車窓から感じられる四季の移り変わり、晴天の時の雄大な富士山など、私の移動時間は贅沢な自由時間です。伊那がふるさとで良かったとつくづく思うこの頃です。

（箏曲演奏家）

ビバ・ティモール レステ・ビバ！

北原　巌男

東京２０２０オリンピック・パラリンピックが目前に迫りました。新型コロナウイルスの早期終息を願って止みません。

選手の皆さんは、決戦の日にコンディションをピークに持って行くべく、一層厳しいトレーニングに邁進されていることでしょう。

そうした中、「やっと当たった入場券だ。絶対行く。直接観戦は迫力が全然違う」、「暑さと人出を考えたらテレビで応援するのが一番いい」など、それぞれもっともな言い分が聞こえてきます。どちらにしても、応援の興奮や歓声が、伊那市内のあちこちで湧き上がる熱い夏になることは間違いありません。

特に伊那市は、アジアで一番新しい小さな東ティモールのホストタウンです。出場選手は、少数精鋭。これまでにマラソン選手や２０１８年１０月インドネシアで開催されたアジアパラ大会のＴ３７クラスの４００メートルと１５００メートルで金メダルを獲得している選手が来伊しています。

ちなみに現地の言葉で「イナ」は「母」の意味。東ティモールの選手にとって、伊那の皆さんは日本の「カアチャン」なのです。厳しくも優しい応援をお願いいたします。

競技の実況中継等を行うＮＨＫでは、昨年から「世界を応援しよう！」プロジェクトに取り組んでいます。これは、オリンピックに参加する１０４の国と地域について、その国や地域の選手が出場する競技会場の大型スクリーンなどに、その国出身の皆さんによる応援メッセージを映し、会場の観客の皆さんと一体になって選手を応援しようというものです。当該ビデオは、各ホストタウンでも映すと聴いています。

東ティモールの応援ビデオは、民族衣装（タイス）姿の３人の女子留学生と３人の男子留学生が、一緒に賑やかで元気な応援メッセージを送っています。

是非ご覧頂き、一緒に応援してください。

http://suports.nhk.or.jp/dream/cheer/

「ビバ・ティモールレステ・ビバ！」

（「勝て・東ティモール・絶対に勝て！」）

（一般社団法人　日本東ティモール協会会長）

応援メッセージ撮影直前

中村不折の魅力

笹本　正治

伊那市に関係する方はたいてい中村不折（幼名鉾太郎）をご存じです。

不折は慶応２年７月10日（１８６６年８月19日）に源蔵とりゅうの子供として江戸の京橋八丁堀に生まれました。父は平沢村（現伊那市平沢）の網野家に生まれ、高遠の名門中村家のりゅうと結婚しました。不折が５歳の時に江戸で書役を務めていた父の仕事がなくなり、一家は明治３年（１８７０）に高遠へ帰りました。不折は北原安定に漢籍、真壁雲卿に南画、白鳥拙庵に書を学び、西高遠学校授業生（代用教員）、21歳の時に西伊那部学校の助教、22歳の時に飯田小学校で図画・数学の教師となりました。広く深い知識の源は高遠にあったといえるでしょう。

明治20年に上京し洋画を学び、正岡子規、森鴎外、夏目漱石らと親交を持ちました。明治34年から明治38年までフランスへ留学し、歴史画の伝統的な手法を修得し、帰国後は太平洋画会系の中心的な画家として活動しました。島崎藤村『若菜集』の装幀・挿絵も手がけています。

特徴ある不折の書は、デザイン性の高さと親しみやすさから、新宿中村屋の看板文字、清酒「真澄」や「日本盛」のラベル、「信州一味噌」など、店名や商品名のロゴに用いられました。また森鴎外や荻原守衛の墓碑も書いています。彼が集めた書道資料は膨大で、世界的に見ても貴重なものが多く、昭和11年（１９３６）東京根岸に書道博物館を開設しました。昭和18年（１９４３）６月６日に亡くなりました。

伊那谷で育ち、世界的視野をもった中村不折は伊那市民が誇るべき人物です。長野県

立歴史館では令和3年（2021）1月9日から2月21日にかけて、中村不折展を行います。皆様にとって不折は親しみの深い人ですが、東・北信の方にとっては遠い存在です。不折のすばらしさを訴えたいと思います。遠くはありますが、皆様も是非ご来館ください。

（長野県立歴史館長）

北海道の家

白井　温紀

北海道に移住して最初に住んだのは、競走馬の牧場跡地だった。広大で、競走用のトラックは羽田から帯広に向かう飛行機からよく見えた。厩舎、厩務員や騎手の住宅の他、林の中に来客用のログハウスもあった。私たち夫婦は、アイリッシュの騎手家族が住んでいた白い家に落着いた。入口のイチイが立派で北海道らしかった。使い勝手の良い家で、台所に地下倉庫まであって驚いた。

庭からは、近くの酪農家の牧草地が見渡せ、その先の河畔林は海まで続いて、海風がそよそよと庭に吹いて来た。庭に洗濯物を干し、その下で昼寝する愛犬のセントバーナードを見るのが好きだった。牧草地は6月と9月に刈り取られ、河畔林は早春から可憐な花が次々咲いた。ここの住所は「芽武（めむ）」。アイヌ語で「水の湧く所」という意味だ。

数年経ち、15キロ離れた「晩成（ばんせい）」という地区で牧場を始め、通いきれないので引っ越した。そこは湿原の広がる起伏の多い土地で、東南に太平洋、西に日高山脈の眺めが素晴らしい。湿原の恩恵で寒さは緩み、夏は涼しい。海霧もあるため酪農家が多い。見渡す限りの牧草地で住宅が少なく、私たちは、地主さんの好意で、牧場に隣接する林の中の小さな一軒家に住み始めた。

その家は、林の斜面を切り土して建てられ、湿気が走るのを避けるためか床下が空いている。内外装に落葉松の板材が用いられ、屋根は赤いトタン葺き。山小屋みたいで気に入っている。南側に一軒幅のデッキが伸び、そこから玄関に入る。戸を開けると、居間と食堂と台所が一つになった部屋。あとは寝室、納戸、洗面所と浴室、そしてトイレ。外に大きな薪置場があり、木立の間から下の国道を通る車の光りやホロカヤントーという美しい入り江が見える。

小さな家に住みたいと思っていたが、北海道でそれが叶った。今は、小さな室内でせめぎ合う生活文化と、屋外の何もない広い庭、そしてその先の自然とバランスをどうとっていくか、それに苦心している。楽しみでもあるが。

（ガーデンデザイナー）

草地を歩く

河の中を歩く

多様なふるさとイメージ

田畑　貞壽

伊那市のふるさとだより第24号の原稿依頼を受けて、はたと思いこんでいるうちに、私の本当の「ふるさと」はどこだろうか。

昨年暮れに、多くのふるさとに関係した図書を見ながら、農村計画学会誌の「最近100年間の「ふるさと」の語られ方―人間の生きる原点としての「ふるさと」による農業・農村再生への展望」と題した文面を夢中になって読んでいるうちに時間がたって多くの図書の整理が遅れてしまった。

ところで私は、1950年代から東京都武蔵野市に住み、近隣の方々や、生活関連の公的なスペースの活用で市長さんはじめ行政関係の皆さんには大変お世話になって70年余の月日が流れた。その間に市民として多くの水や緑・ごみ問題・エネルギー問題・生物多様性保全など、多くの住みよい環境づくりに市民参加による武蔵野方式と呼ばれる計画づくりの第1歩をふみだした。それは市民参加による武蔵野市第1期長期計画・調整計画策定委員会の委員に参加し、市政・行政・市民団体・一般の市民の皆さんが参加により計画案作成と合わせて各種事業の推進に関わりあった。続いて第2・3期長期計画・調整計画などもお手伝いして20数年たち、その後市民がつくる計画が、第6期長期計画令和2―11（2020―2029）年度が完成している。

昨年暮れに武蔵野市の秘書広報課より第1期長期計画に関わった小生に、季刊武蔵野に武蔵野ヒストリー第1期長期計画策定委員会スタート（1971―1980年）として当時の社会状況の中で全国的にも武蔵野方式は推奨されているが、その辺にふれて世代交代している若年層の市民の方々に新たなふるさとのまちづくりビジョンの参考にしたいということでお話をしていた時に、冊子の前文に「新しい市民のふるさと武蔵野市の長期戦略」として構想（ビジョン）が挙げられ具体な都市改造の六大事業が進められた。したがって私のふるさとは武蔵野なのかと思い、伊那は第1のふるさと、武蔵野は第2のふるさとにしようと思った。ではそのほかにふるさとは、上げられないかと考え、第3のふるさとと呼んでもよいか、例えば未来塾を開きふるさとおこしに15年ほど携わった群馬県の沼田市にふるさと準市民の会が設置され、誘いを受けて何回か参加しているうちに、ここも私から見れば「第3のふるさと」かな。このようにふるさとイメージを取り出すと2―3年以上住んだ国外のまちも第3のふるさとといえる。と、私には様々な「ふるさと」があるんだとひとりがってんしていた。

ところが　昨年暮れに、既に紹介した「伊那谷自然環境ライブラリー」に組み入れる図書の整理をしている途中、関係している学会誌の整理を始めた矢先に農村計画学会誌に農村集落とふるさとをとりあげた論説が目について読みだした。（『最近100年間の「ふるさと」』の語られ方―人間の生きる原点としての「ふるさと」による農業・農村再生への展望）と題して、重岡徹氏の農村集落の100年間の変化を3段階に区分して整理した内容で生まれ育って世代交代に沿って農村集落に住み続ける人達や私のように都市に移動し住み続け、世代交代しても住み続ける人達、都市と農村双方に住み続ける人達について整理して、これからの農の社会的構造の在り方の締めくくりに「自然性への回帰やアイデンティティの回復」などは、いずれも自然、場所、土地といった「土」との自覚的な繋がりをもとめているとのこと。したがって人間にとって不可欠な場所「土」に象徴されるような農業農村の再生を制度的にも考えることは当然だが農村や都市地域を問わずふるさと意識をもって地縁ネットワーク、農的土地所有、自然との共生が編み出してきたモラルを自覚的に掘り起こすことだと結んでいる。

読んでいるうちによく理解できないまま2時間ほどの間、ふるさと関係の社会論・文化論・経済論などの資料を見ることになった。結局、近年のふるさとイメージは多様化しているのだと納得し、むしろ私の年代は、この論説を読むまでもなく伊那市、武蔵野市、イスラマバード、沼田市と1のふるさと2のふるさと3のふるさとがあるんだと述べたがその基盤となっているのは、自然と土地と五感にふさわしい環境が保持されていることが「多様性あるふるさと」であると勝手に納得することとした。

（千葉大学名誉教授）

今年の読書計画

中村　彰彦

私は高校・大学時代に日本古典と近現代文学を濫読し、文藝春秋に勤務して編集畑にいた十九年間のうちの約十年は、芥川・直木賞の社内選考委員として純文学雑誌・中間小説誌、書き下ろしの小説等を読みつづけた。四十二歳で独立し、筆一本の生活に入ってからは、史伝文芸を書くために戦国・江戸・明治時代についての史料とつき合うことが多くなった。

目下、その私が老後の楽しみとして計画しているのは、『伊勢物語』の研究と架蔵する世界のノンフィクションを読破することだ。『伊勢物語』に関する先人たちの研究はすでに入手済みだが、ほかに書くことがまだあるのでこれは後回しとし、今年は七十一歳になるので、読み残しのノンフィクションから“消化”することにした。

昨日読了したのは、スウェン・ヘディン『ゴビ砂漠探検記』。今日はチャールズ・A・リンドバーグの『翼よ、あれがパリの灯だ』を読み終え、シュリーマン『トロイアへの道』やカーター『ツタンカーメン発掘記』へと進むつもりだ。

文芸書は表現のひとつひとつを吟味しながら読むので、一時間に原稿用紙にして百二、三十枚しか読めない。対してノンフィクションは事実の報告が主体だから、訳文の上手下手などはあまり気にせずに読んでゆく。だから文芸書のほぼ倍のペースで読めるところが、ありがたいといえばありがたい。

なお上記の諸作は「世界ノンフィクション　ヴェリダ24」として出された二十四巻本に収録されており、これは昭和五十三（一九七八）年、筑摩書房から刊行された。

そのころの私は、考えてみると文春に入社して五年目の二十九歳。当時の私は、この二十四巻本を四十一年間も書架に寝かせてから読みはじめることになるとは、夢にも思わなかったに違いない。

（作　家）

漬菜の色とアルプスの夕映え

中村　三郎

1．高校を終えてから伊那を離れて生活をしていた私は、ふるさと伊那へ帰るとき、時折り茅野から杖突峠を越えて藤沢・高遠を経て帰省していた。

ある時峠を越えて杖突街道（国道２５１号線）を南へたどり、昼食時「御堂垣外」にて古い食堂へ入った。先ず出してくれたのはお茶と漬菜であった。久しぶりの漬菜が美味しく、その時ふ！と思い出したのは「信濃路に帰り来りてうれしけれ　黄に透りたる漬菜の色は」という島木赤彦（１９２６）の詩であった。この漬菜と共に白い飯をいただいた。かつてはこの漬菜と共に何杯も飯をお代わりしたものである。漬物上手なおふくろや伊那谷への思いをふくらませつつ、高遠・伊那へと車を走らせた。

2．昨年（令和元年）10月頃、伊那から木曽へ抜ける「権兵衛街道」の入り口付近で地盤の挙動があり、街道が不通となり心配であった。しかし12月には街道通過がなんとか可能となりほ！っとしている。この街道は伊那・木曽の人々にとって古来大切な街道で「伊那節」にも謡われている。当時「十丁目」の坂を登りきると街道沿いはほとんど松林の樹林帯であった。かつて中学生の頃、2年上の兄と薪（たきぎ）に使用する松の枯れ木をもらい受けに行った。当時の街道は凸凹の激しい行動しにくい道であった。2人で枯れ枝をいっぱい背負いつつ、樹林帯を抜け出して展望のきく場に出た。遥か東、初冬に冠雪した南アルプスの夕映えの山々を2人で眺望し、その時の感動が忘れられない。後日、旧制中学へ参上した折、かつて国語の先生であったという作家臼井吉見先生の詠まれたという詩をご教示いただいた。

「伊那の谷　すでに日暮れて
仙丈は　明るきまゝに　雪
映えにけり」

この詩を反芻していると、伊那路の素晴らしい景観を想起することも出来る。伊那の山と谷と里の素敵な「フィールドミュージアム」の風情、力を合わせ守りたいものであります。

（防衛大学校名誉教授）

中村三郎「南アルプス仙丈ヶ岳
（３，０３３m）の初冬の雪」

私と野生動物との付き合い

新村　洋子

私は小学生の頃、飯田市の江戸浜町に住んでいました。その頃の趣味というか娯楽は休みの日に母にお弁当を作ってもらって友だちと連れだって散歩（遠足）に出かけることでした。

例えば徒歩で元善行寺とか見晴山公園です。見晴山は飯田線の上郷駅の踏み切りを渡ってすぐ上にある公園で当時頂上には鉄製の大きな檻があり、「サル」が5、6頭飼われていました。私たちはそのサルに餌をやったりして遊ぶのが楽しみでした。

長じて実家の伊那市の狐島に住むようになり、ますみヶ丘近くのグリーンファームに野菜類を買いにいくようになりました。そこの空き地には2頭の「ツキノワグマ」が飼われており、それがめずらしい「ツキノワグマ」との出会いでした。

その後、弥生ヶ丘高校の同級生の家に遊びに行った折、彼女が家に置いた長靴が見つからず捜したら、村はずれの道の上に捨てられてあったとか…。おそらくサルの仕業だろうとか、サルが両手でカボチャを抱えて逃げていくのを目撃したとか笑えないサルのいたずらを聞きました。

後に大鹿村の村歌舞伎に魅せられて何度も村を訪れましたが、山林にはりめぐらされた強固な柵、木の幹に巻きつけられた緑色の網に驚きました。村人の話ではシカ除けのためだそうで、美しい山林は変わり果てた姿でした。農業被害、林業被害はおびただしく南アルプスの高山植物はシカに食べつくされそうで対策が追いつかないとも聞きました。

シカ（ニホンジカ）といえば優美でやさしそうな動物と思われそうですがシカはクマやサルより人間の生活にとっては恐ろしい動物といえそうです。

日本最大の湿原である尾瀬ではシカの影響で湿原が荒らされて悪影響が心配されています。ニュージーランドでは増えすぎるシカ対策に取り組むことを「ディアーウォーズ」（シカとの戦争）と呼ぶそうです。

（写真家・絵本作家）

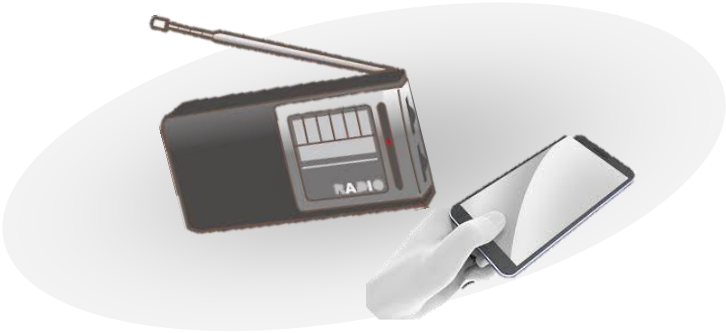
ラジオの時間

西村　与志木

少し以前の話にはなりますが三谷幸喜さんの舞台と映画で「ラヂオの時間」が発表され話題になりました。遅ればせながら私に今、「ラジオの時間」が訪れています。それはスマホで聞くアプリのＮＨＫラジオ「らじる☆らじる」です。ここには四つのチョイスがあって①Ｒ１（ラジオ第１放送）②Ｒ２（ラジオ第２放送）③ＦＭ放送④（聴き逃し）から選択して聞くことができるのです。私はこの中では（聴き逃し）に最も魅力を感じます。それはまさに「聴き逃した」番組を後からチョイスして聞くことができるという画期的なものです。そのなかで個人的な好みから言えばジャンルは「ドラマ」「ドキュメンタリー」ということになるでしょうか。ドラマではまず「新

日曜名作座」をあげておきましょう。西田敏行と竹下景子という名優二人が、どんな役が何人出てきても二人で演じるという約束になっています。騒乱の戦場で劇突する武将たちも西田さん一人が演じます。無論、若武者が入れば竹下さんも演じることはありますが。ラジオドラマならでは「効果音」「音楽」も相まって思わず引き込まれるシーンになっていきます。この他にも連続ドラマの「青春アドベンチャー」一話完結の「FMシアター」など興味は尽きないのですが、ちょっとドキュメンタリーのジャンルに目を転じてみましょう。私が注目している「朗読」の時間があります。これは夏目漱石などの明治の文豪から現代の作家の作品をベテランから若手の俳優が一人で朗読するという番組です。一回が十五分。五回から三〇回続きます。スマホを持って散歩しながら、またベッドサイドに置いて聞いています。私は四〇年近くドラマ制作に携わってきましたが、そのほとんどがテレビドラマで、ラジオドラマはわずかしか関わったことがありません。携帯電話の役割しか期待していなかったスマートフォンから「ラジオの時間」がもたらされたのは幸せなことです。

（元NHKエグゼクティブ・プロデューサー）



「幸せ」とはなにかを考えた夏（…と下痢）

野溝　友也

夏、インド北部のラダックを長女と訪れた。酔狂と言われればそれまでだが、人の行かない場所が好きだ。今までも何度かそういう旅に家族を誘い断られてきた。今回もそれを前提に娘のひとりを誘ってみたら「行きたい」と言い出した。何が彼女の心を捉えたかは今も不明だ。

空港が富士山と同じくらいの標高。タラップを降りた瞬間から頭の奥に常に鈍痛を感じ続けた。高度順応のため一旦標高を下げる。その道中、ローカルの食堂で初めて現地の食事。今までアフリカのジャングル、極寒の北欧、乾燥した南米の大地でキャンプなど様々な環境で取材をしてきた。現地の食事にも比較的早く馴染むことができる方らしく、体調を崩すこともなかった。だが、娘はそんな経験も少ない。日本から丸一日の移動で疲労も残る体に現地の食事。調理に使う水も怪しいもんだ。これは胃腸にくるパターンかも…それも娘にとってはいい経験だろうと思う。薄いカレー味の麺。口には合わないが、初めてのラダック料理を噛み締めた。

村は美しく、人は優しく、インダス川の音が心地よい。その日は溶けるように眠りに落ちた。翌朝目覚めると、案の定、お腹にきてしまっているようだ…。予想と違うのは娘ではなく「僕が」というところだ。

2日ほど下痢が続き、ようやく動けるようになった頃に訪れた小さな集落。粉ひき小屋で出会った老女に大麦の粉、ツアンパとバター茶を振る舞われた。一瞬ひるんだが、優しい味にホッとする（トイレ…と呼ばれていた小川には3度ほどお世話になった）。

「あんたたち日本人は、こんなところまで来るなんて、ほんとに暇なのね。わたしなんか、毎日することがいっぱいあって、遠いところなんか行けやしないわ」。別れ際、彼女に言われた言葉を反芻した。現代文明から遠く離れた場所で、日々同じことを繰り返す生活に僕は耐えられない。しかし、人間の幸せっていったい何なんだろう。真剣に考えこまされずにはいられなかった。

娘はその後もよく食べ、よく寝て体調を崩すことはなかった。この春から留学で海外に向かう彼女の胃袋には心から安心している。世界に出て、幸せとは何か、考えてくれたら嬉しい。

（テレビディレクター）

「地球はまるい」

橋爪　恵一

年を追うごとに望郷の念が強くなる。

伊那北高校で初めて手にしたクラリネット。従兄弟に誘われて入部した吹奏楽部。この出会いが、我が将来を決めた。

この楽器に出会ってから、毎朝早くに登校し練習、放課後暗くなるまで吹いていた高校時代。

卒業後は、東京藝術大学へ進学。プロの道を目指すべく大いに遊び、学び、アルバイトも一生懸命の大学生活。

15歳で出会ったクラリネットを吹くことを生業として歩んだ半世紀。

65歳にして、続く限り演奏していこうと始めたクラリネットリサイタル。

プロの演奏者として、この年までやってこられたのは多くの方々の応援のおかげだ。深く感謝している。

2011年3月11日に勃発した東北震災への支援活動「できることをできるだけプロジェクト」では、同年5月に伊那市役所の前でチャリティコンサートをさせてもらった。

その後訪れた宮城県石巻市で老舗の呉服店と知り合い、津波で被災した着物を譲り受け、演奏者の衣装にリメイクして、現在も震災の記憶を伝え続けている。

さらにそのハギレを入れて50センチ四方のパッチワークを作り、未来の子供たちへの応援旗も作ってきた。

この布は世界46カ国の参加、2800枚になっている。全て、音楽とアートの力によるものだ。

私たち企画のコンサートでは、音楽、アンサンブルの楽しみに加え、東北震災の記憶の伝授、世界が手をつなぎ、未来の子供たちの安全と平和を願い、5×5NEXTと題したパッチワークの布を展示している。

今年の橋爪恵一クラリネットリサイタルは11月23日（祝日）午後3時開演いなっせホールで開催。

クラリネットの魅力を存分に発揮するモーツァルト、ウェーバー、ブラームスの三大クラリネット五重奏曲を予定しているので、是非聴いてほしい。「地球は円い」。

今年は新たに、東京と伊那を音楽とアートでつなぐ拠点を伊那に作りたいと思っている。

（クラリネット奏者）

信州高遠美術館で開催した橋爪恵一
クラリネットリサイル（2019／10／27）

晩夏とデパートの階段

原　克

記憶は匂いにも宿るものらしい。

プルーストの長編『失われた時を求めて』で、主人公はマドレーヌをほおばった瞬間、忘れていた幼少期の夏の日々を思い出す。

味覚という非言語媒体によって、記憶が、あらたに言語化されはじめるのである。

フランスの洒落た菓子とは違うが、似たような経験をした。ふとした嗅覚で、少年時代が終わろうとしていた夏を、唐突に思い出したのだ。

過日、科学博物館で、爬虫類の部屋に入ったときだった。

冷たく、濡れた皮膚からたちのぼるのであろう。あたりに充満する、蛇やワニの臭気に包まれた途端、あの夏の日を思い出した。

あれは、小学校六年生の夏だった。場所は、駅前の繁華なアーケード街に、ひときわそびえ立っていたNデパート。

高度経済成長が緒に就いたばかりの頃、少年の眼には、Nデパートの威容がまぶしかった。

その日も、三階の書籍コーナーをのぞいた後、屋上の遊具を見ようと、階段に向かった。

手すりにぶらさがって、ジグザグ階段を登って行った。あと一階あがれば、屋上階が見えてくる。そのとき突然、異様なニオイが頭上から襲ってきた。

明るくて、大きく、楽しい、これまでのNデパートの雰囲気を、一気に息苦しくさせる、濃密で、禍々（まがまが）しいニオイ。それは、まさしく異臭としか言いようのないものだった。

得体の知れない不安から、歩を止めて、ゆっくりと階段をつま先でさぐりながら、首を伸ばして、そうっと覗いて

みた。

そこにあったのは、階段の段ごとに並べられ、ずっと屋上口まで続いている、ガラスケースだった。その数十個のケースには、オオトカゲやニシキヘビ、巨大な亀やカメレオンなどが、じっとうずくまって、ゆっくりと腹をふくらましたり、へこませたりしている。いずれも眼を射るような深紅や、毒々しい緑色をした、熱帯雨林の爬虫類たちばかりだった。

天井には、「世界の大爬虫類展　県内巡廻」と書いた横断幕が、風もないのにゆらいでいた。

明るく、大きく、楽しい少年時代は、気づかないうちに、唐突に終わりを迎えるものなのだろう。

やがてベトナム戦争を知った頃からか、明るい日々は暗転し、黙考する日々が始まった。

あの日、Nデパートの階段で流れてきた匂いは、少年時代の終わりを告げ、うずくまったまま動かない爬虫類の不気味さは、来たるべき世界の冷酷さを、予兆していたのかも知れない。

（早稲田大学教授）

伊藤三千人「深雪の仙丈ヶ岳」

平和主義に徹せよ！

丸山　敬一

日本人は応仁の乱に始まるほぼ１００年の戦国乱世を通じて心から平和を希求し、徳川２５０年の平和な世を作り出した。しかし、明治になると戦争の惨禍をすっかり忘れ、日清戦争、日露戦争、第一次世界大戦と10年ごとに戦争を続け、さらに満州事変、日中戦争、太平洋戦争と戦線を拡大したあげく全土を焼土と化して敗北した。

日本国憲法の前文と第９条を読むと、日本人の戦争はもうこりごりだ！心の底から平和を望む！という切迫した気持ちがひしひしと伝わってくる。日本国憲法の誕生した頃小学生だった私は、日本が平和主義（＝国際協調主義）、民主主義（＝国民主権主義）、自由主義（＝基本的人権の尊重）の三原則のもとに新生日本として再出発しようとしていた時代の若々しい雰囲気を懐かしく思い出す。

だが、戦後一貫してこのすばらしい憲法を変えてしまおうとする勢力が存在してきた。何とも不思議な事に憲法尊重擁護義務を負っている（九九条）首相が最も熱心に改憲を主張している。たしかに憲法も時代に合わなくなって来ているところもあり、時代と共に変えた方がよいところも出てくるであろう。しかし上記三原則は絶対に変えてはならないと思う。

中でも特に平和主義は重要だ。日本は戦後七〇年以上戦争をしなかった。これを百年、二百年と続けていけば、日本は絶対武力に訴えない国だ、武力による威嚇さえしない国だ、あらゆる紛争を平和的に解決しようと努力する国だ、という信頼感が全世界的に形成され、こうした道徳的権威こそが日本の最大の防衛策になると思う。そして、それこそが日本国憲法の平和主義の精神でもある。

（中京大学名誉教授・法学博士）

中村哲医師の歩いた道

三沢　節夫

人が生きるのを助けるのが人である。この言葉が真理であることを証明した人が、アフガニスタンで活動した中村哲医師である。世界でたった一人のひとが一発の銃弾で倒れる非条理を、いま、百万人の人びとが悲しんでいる。この折の朝日川柳には

神様はいないと思う
　　時がある
哀悼の舞を見せてね
　　アゲハ蝶

と詠われた。

中村さんは１９７８年、ティリチミール登山隊の同行医師としてアフガニスタンを初めて訪れた。山登りの楽しみとともに、パルナシラウとモンシロチョウの原亜種を探したいという望みがあった。82年には、日本キリスト教海外医療協力会の医師としてパキスタンのペシャワールに派遣された。91年、パキスタンとアフガンの境界の無医師地区に診療所を開く。93年、ダラエヌール周辺で悪性マラリアが大流行、二千万円の寄金で２万人以上の命を救う。98年、中村医師の活動を支援する日本での組織、ペシャワール会が生まれる。２０００年、干ばつがアフガン全土を襲い、水不足で赤痢やコレラが蔓延、水源確保のために１６００本の井戸を掘り、カレーズ（地下水路）を再生し、部落民の難民化を食止める。

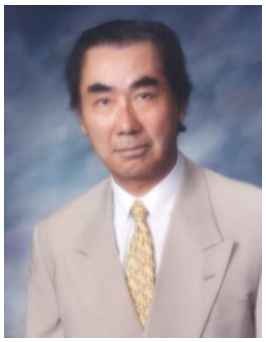
中村さんは「武器によって平和は訪れない」という強い信念を持っていた。人々が打ちひしがれている砂漠の荒野に立って、ここを緑豊かな緑地に変えていくことを決意した。その計画を皆に語り、自ら重機を運転し、土石を肩に背負い運ぶ。部落民みんなの力でマルワリード用水路を築き、百万本の樹木を植えた。川の流れを学ぶ折に、中村さんは郷里・福岡県の山田堰の考えを取り入れた。こうして、65万人の人々が平和に暮らせるカンベリ農場が生まれた。また中村さんはこの地にモスクとマドラサ(学校)を建て、今、そこで学ぶ子供たちの目が輝いている。中村さんは、これから20年間はアフガンの地で働くと決意を語っていた。

神様も目こぼしすることもある。そして、世界はいま混乱を極めている。各地で戦火が絶えず、国外に逃れた難民・避難民の合計が６５６０万人に上り、生活に困窮する人々が全人口の十数％にも及ぶ。大国の政治指導者の中で信頼できるのはメルケルさんしか見当たらない。カオスの星「地球」をコスモスの星に変えていくには、私たちは中村さんの遺志を心に刻んで、一歩一歩、前進するしかない。

（日本大学名誉教授）

日米貿易交渉の今後

三澤　満



昨年7月伊那食品工業の主催で、かんてんぱぱ西ホールにて、「日米貿易交渉の行方と日本の対応」と題して講演し、伊那の皆様と意見交換する機会があった。その際、交渉における問題点など指摘したが、その後9月日米両国は貿易協定に正式署名した。その内容は、日本側が牛肉や豚肉など米国産農産品の関税を環太平洋連携協定（ＴＰＰ）水準まで引き下げ、一方、日本側が最も懸念していた、米国が通商拡大法２３２条に基づき、安全保障上の観点から検討していた自動車及びその部品への追加関税25％の発動は回避された。

ここでは、まだ交渉が終わってはいない点に注目したい。協定では、米国が日本の農産品市場開放について「将来の交渉において、特恵的な待遇を追求する」と再協議規定が導入されている。今回、自由化されなかったコメなども将来の交渉で対象となる懸念が残っている。日米は協定発効後、第2段階交渉の範囲を協議する方針であるが、米国の日本からの自動車・同部品への関税問題は再燃する可能性が残っている。

今回の交渉で、米国は、通貨安を誘導する政策を禁じる「為替条項」について「確実に盛り込みたい」としていたが、日本側は協議での議論は避けたいとの強い姿勢で、この問題は、積み残しとなっている。試みに、２０１８年11月に署名した米・メキシコ・カナダ協定では、この為替条項は入っている。

もともと米国産業界には、

「アベノミクスと異次元緩和が円安・株高をもたらした」との見方が定着しており、アベノミクスの始まった8年前には、円は80円前後であったことを考えると、現状の110円前後では、米国側の主張もそれなりの妥当性がある。為替操作国に指定すれば、米国は、追加関税などの経済制裁を発動できることになり、今後の為替の動向次第では、日米交渉の次の目玉となる可能性がある。

今回は主として「物品貿易」に限定したが、米国は、これを「デジタル貿易」、「サービス貿易」に交渉範囲を広げたい意向を持っている。「デジタル貿易」とは、インターネットを通じた物品の売買で、米国が世界的に突出している分野である。どこで付加価値がつくか捕捉が難しい面があり、国際取引で、どの国が課税できるかいまだに不明確である。そのため、米国が協定でルール作りを急ぐのには根拠がある。「サービス貿易」では、米国の業界には、医薬品の知的財産保護ルールや金融、投資の自由化などを求める意見が目立っている。

日米貿易交渉は、今後も継続する。これまでの日米関係では、規制緩和を含め、様々な形で、米国側の要望を日本が受け入れる流れが出来てしまっているが、今後の貿易交渉で、新しい時代の日米関係がどう変貌して行くか、しっかりフォローする必要がある。今年の11月には、米国は大統領選を控えている。選挙対策もあり、トランプ大統領から、日本に対し過激な要請が出て来てもおかしくない。これも要注目点である。

（ハワイ大学経営学部大学院教授）

格言暗記は心の良薬

向山　僚一

私の生まれは高遠の藤沢村。多感な少年時代、信州の大自然に深く感動して以来、絵の道を歩んできましたが、一方では東京で小学校の教師としての草鞋も履いてきました。

年少時の私自身の学びを振り返ってみますと、戦時中だった為、教科書一頁すら開いたこと無し、それどころか教科書そのものが無い年も何年間かあったように記憶していますが、左脳系が全くダメで、右脳がわずかにといった処でした。それでも、曲りなりにも教師の職業をまっとうできたことは、何故かポンコツ、老いぼれの年代になった今でも口をついてすらすらとでてくるいくつかの格言のおかげと思っています。父からも母からも、それらを教えられた記憶無し。では学校で？いつ頃？どこで？が全く思い出せませんが、今の私に残っている格言が今の私を在らしめているように感じています。私が前の世代から受け取り、その意味は今わからなくてもよいと、私が次の世代に伝えた格言。一度覚えると一生忘れぬものです。

・少年老い易く学成り難し。一寸の光陰軽んずべからず。今だ覚めず池塘春草の夢。階段の梧葉すでに秋声。

・男児志を立てて郷関を出ず。学若し成る無くんば死すとも還らず。骨を埋むる豈に唯だ墳墓の地のみならんや。人間至る処青山有り。

・成せばなる。成さねば成らぬ何事も。成らぬは人の成さぬなりけり。

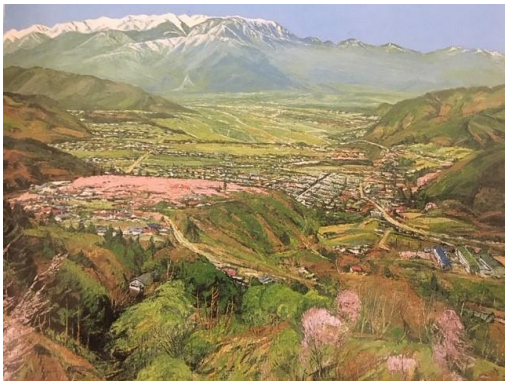
・艱難汝を玉にす

・玉磨かざれば光なし

・念ずれば通ず（花開く）。

私の教師としての経験から言うと、人は強制されると理由なしに、それを避けようとします。私はゲーム的に生徒たちに格言を覚えさせてきましたが、上手くいけばいつのまにかそれが身に付き、他動的な勉強も、能動的、自動的になり、寸暇を惜しんででも自ら努力していこうとするような子になっていくものです。風邪薬は体の為、格言暗記は心の為の良薬と言われていますが、けだし至言です。

（洋画家）



向山僚一「伊那高遠」

駅伝について思うこと

山北　一司

本年1月2、3日開催の第96回箱根駅伝の平均視聴率は28・1％（1987年に日本テレビが中継を開始）。大晦日のNHK紅白歌合戦は37・5％であり、年末年始の番組では紅白に次ぐ高視聴率番組となった。

観客動員数では、収容人数に限りのあるホールは、沿道応援可能な駅伝の比ではない。

筆者もここ数年、テレビ観戦では飽き足らず沿道で応援する一人となった。昨年11月3日の第51回全日本大学駅伝では、朝7時半ころには熱田神宮前（スタート地点）の母校の応援合戦の場で校旗を持っていた。

選手を見送った後、応援バスに乗り込み伊勢路へ。伊勢神宮前（ゴール地点）にある大型ビジョンで応援する群衆の一人と化した。優勝は逃したが、終了後の懇親会では監督や選手のあいさつがあり、箱根駅伝に向けての力強い意志が表明され、「箱根はいける」との感触を得た。箱根駅伝では見事総合優勝となった。

伊那への赴任時、駅近くの旅館に宿泊。駅伝関係者で満員だったが、運よく宿泊できた。「●●高校駅伝御一行様」と宿泊の看板が掲げられ、街は駅伝色に染まっていたのが懐かしい。

1978年から開催の高校伊那駅伝の凄さは、箱根駅伝の2019年のシード獲得大学における伊那駅伝出場経験者数でもわかる。東海大学の8名を筆頭に52名もの選手がいた。

2017年10月TBS系で放映された「陸王」で、（役所広司さん主演、足袋製造会社のランニングシューズ開発の話）、昨年の大河ドラマは「いだてん」で、箱根駅伝をつくった「日本マラソンの父」金栗四三が登場。金栗はランニングシューズの開発でもマラソン界に貢献。

今年の箱根は記録づくめ。「記録を伸ばす革命的シューズ」というような表現がマスコミを賑わした。「ナイキの厚底シューズ」が記録を叩き出したのだという。

記録は叩き出せても優勝は叩き出せない。チーム力と戦略、加えて自分を超えるものが出せる条件が整った時、勝負の女神が降臨する。駅伝の奥行きは深く興味深い。

（芸術文化普及家・生涯学習上級コーディネーター）

伊那に出逢って

由紀　さおり

2020年、東京に住む私は、穏やかな晴天の中で幕を明けました。

いよいよオリンピック・パラリンピックイヤーになりました。

日頃の努力をどうぞ悔いのない結果へと導いてください。私たちは大いに期待し応援したいです。

そしてこれからの10年、道を間違えることのないよう、日本国内のみならず地球規模で考えなくてはいけない緊急の事態が迫っています。温暖化、プラスチックゴミ、フードロス等々・・・。でもこの伊那に関しては、何か悠然としていてゆっくりと時間が流れています。私の幼いころの生活が今もそのまま残っていて、不便なことや不都合なことは徐々に改善されつつ、自然のもつ季節の風景、収穫される野菜、果物、それにまつわる暮らしがあたり前のように残っていることに喜びと安堵の思いを感じます。

人と人とのつながり、思いやる心、雄大な山々の景色、どれをとってみても、今や宝物です。

それらを題材に、歌っているのが先人達が作り残してくれた童謡唱歌なのです。

アナログとデジタルの両極を生きている今、その両方を知ることが大事です。記憶しなくてもいい、すべて検索すれば良いという風潮はどうなのでしょう。幼いころから体験し、数えられた数々の出来事を記憶し、それが元となって思考する力へと成長していくのではないかしら。その大切な要素が伊那にはたくさんあるのです。

この地で育ち、大人になっていく子供、大いに未来を担うことでしょう。そんな感性があふれる伊那市、それを夢見て今年も歌いに出かけます。それが私の役割りと思っていますから。

（歌　手）